

いてはこの簡易製本で保存するようにしております。

当図書室は、小さいですが、充実した経済学の蔵書を所蔵しており、経済学を学ぶ人にとって、京都大学内で必要不可欠な施設となっております。

(かなもり たかゆき)



第14回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)に参加して

文学部閲覧掛 藤 山 優 美

昨年11月28日、29日の2日間にわたって第14回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)が開かれました。第13回のテーマが「電子ジャーナルの導入と外国雑誌収集のあり方」であったのに続いて、今回は「電子ジャーナルとコンソーシアムの形成」でありタイムリーなテーマであったと思います。ただ、工学部から文学部に異動して以来「電子」という言葉には縁遠くなってしまった身にとっては、状況が把握できるのか、講演内容が理解できるのかいささか不安を抱いての参加となりました。

最初に千葉大学の土屋図書館長より「大学改革の核としての電子図書館」というテーマで国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースの活動、成果を交えて基調講演がありました。そのお話し振りからメンバーの方々が従来の業務や研究に加え多大な労力を払われたことが窺えました。タスクフォースは、Elsevier Science社の雑誌価格問題が契機となって国立大学でのScience Directの導入をはじめ、他社の電子ジャーナルの契約に向けても協議するといった趣旨で設置されました。このタスクフォースのおかげで、コンソーシアム形成の足がかりとなり、大学によっては来年度の洋雑誌コス

ト増の抑制や導入タイトル数の増加ができたことは大きな成果だと思います。続いて各大学から電子ジャーナル導入状況や利用教育担当者研修、コンソーシアム形成について事例報告がありました。

各報告から共通に感じたのは導入への調整と予算確保の難しさです。どの大学も、利便性はもちろんですが、高騰する外国雑誌への対応策として電子ジャーナル導入による重複タイトルの整理に踏み切ったという事情がありますが、教官や研究者がタイトル決定権や予算を握っている現状においては、経費負担率等をめぐる調整は想像以上に厄介なものである事を目の当たりにしました。琉球大学における200数十回にもおよぶ運営委員会での検討、負担額をめぐっての学部間の“攻防”での関係者のご苦労と気苦労は察して余りありました。コンソーシアムについては奈良先端科学技術大学院大学が事務局となり、NTTや松下電器、近畿大学農学部図書館などがメンバーとなっている「京阪奈ライブラリーコンソーシアム」が異色でした。産と学、地域との連携の視点からまた国立大学という中立的立場から窓口を務める意義があると報告されていましたが、運用ポリシーや役割意

識をしっかりと持っていないと、ややもすると一方に偏ったり煩雑な調整事務処理のみを引き受けることになりかねないとの危惧も感じました。

シンポジウムの内容を理解できるか不安を抱いての参加でしたが、講演や報告は今後の大学図書館のあり方を考える上で刺激となりました。特に北海道大学附属図書館の坂上事務部長の特別講演は、電子ジャーナルの導入からコンソーシアムの発達、海外コンソーシアムの現状など、素人の私にとっては大変参考になりました。シンポジウムを振り返って最も考えさせられたのは、電子ジャーナル関連の予算を始め、大学図書館の財源をいかに確保し運営するかに今後真剣に取り組まなければいけないということです。コンソーシアムの形成と参加はその一手段にすぎません。タスクフォースの活動のおかげで文部科学省より電子ジャーナル導入経費

が措置されました。また、昨今の科学技術関連部門への重点配分や大学予算配分方式の変更は追い風となり得ます。しかし一方で学生用図書購入費が大幅に削減されるなど重点分野以外への影響もでています。仮に配分方式の変更を利用して大学分から図書館予算を確保できたとしても、運用を誤ると、予算減となった教官を始め利用者の支持は得られません。最近、アメリカの大学運営に関する講演をきく機会がありました。アメリカでは学術研究と大学の経営を熟知した専門家が運営にあたっているとのことでした。土屋図書館長が「現タスクフォースメンバーは任期切れや息切れ」と言われていましたが、もはや図書館職員個人の熱意だけでは限界にきているのではないのでしょうか。日本の大学図書館にもマネージメント専門のスタッフを養成・配置することが必要だと思います。

(ふじやま ゆみ)

